

なりませぬまい
(リ) 二つ以上の繪畫を板上にかへける事は幼兒の

注意を一方に集めさせる上に不利益な様に考へられますが一談話に關する繪ならば談話の進行につれ一枚より二枚と並べ掛けてさしかへがわりませぬ

(ヌ) 小人數の幼兒等と隣居して談話する折には何事も家庭的にやれますから繪を示す折などにも學校らしく鞭などを用ひず指した方が見よくもあり危険でもなくて宜しう御座います但し鴛竿は小奇麗なのを一本用意いたしてかきたいものです

幼稚園に於ける幼兒 保育の實際

某 女 史

五談

談話は幼兒の最も好む所にしておもしろし、大抵は黒板の前に腰かけを二別に並べてなしたり、廣く一列に並べてなせしこともありし

が話しをする人に遠き子供は亂れ勝ちとなり易し、

たい空に話すはむづかしく大抵繪を示して繪とさきの如くなしたり、又二度目三度目の話の時には成べく發問的になし幼兒の知れることは話さしめぬ、

時には前に出で話さしむることありたり、はじめの内多くは話す積りにて前に出ながら話し得て歸るものありたり、然れどもかゝるものも大に其勇氣を賞しやりたり

今迄の内にて一番好みしものはやはり桃太郎なり、五六度もなせしが尙飽く様もなかりき桃太郎の話をなせし當時一の組のものが原三七を桃太郎として遊びくれしに三七眞に桃太郎となりて一の組のものを鬼となしこれを征伐せんとして一生懸命に追ひかけしは骨稽なり

き、舌切雀などはあまりおもしろからず又話し憎かりき、

六唱

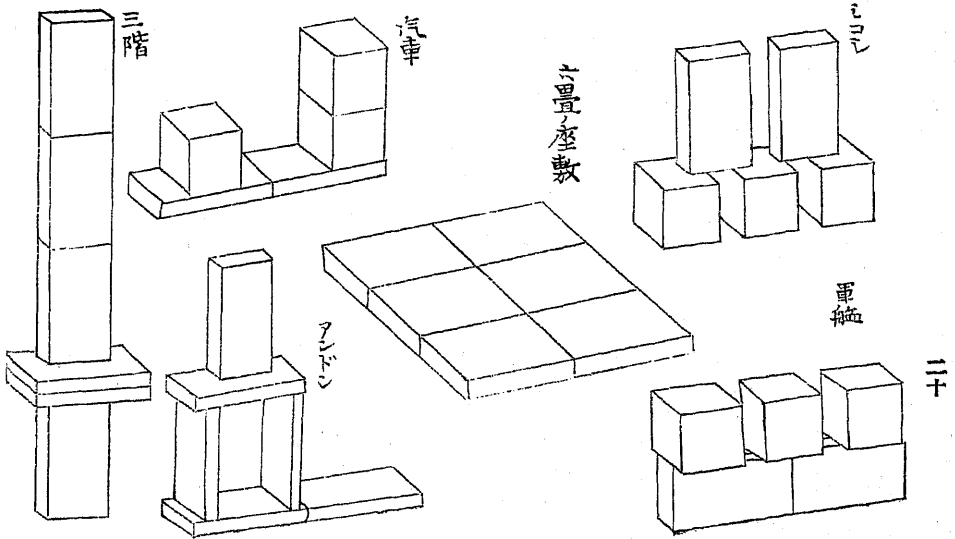
入園當時より唱歌は別段に教へしと云ふほど

七積

にもわらじ大抵は上の組より聞き覚えたれば
 たり其誤れるを直す位のことなりき教へしな
 かにて紀元節など少し骨折れたりこれ子供に
 は面白くなかりしためならん大抵二組に分ち
 樂器の横に二列又は三列となしたり終り頃
 は一列となしたりはじめの内はいろく變化
 も附し飽かぬやうに歌はしめたり、第三學期
 にありても尙其方法をととりしが、次第に變化
 を少なくして歌ふこと、それを樂しましむる
 やうになす積りなり、
 發聲練習はてはへ調のド、ミ、ソ位をなしたり。
 唯の曲にて歌詞を變じ漱車電車等を歌はしめ
 しによるこびて歌ひぬ

木

入園當時は正方形、長方形、を四つ與へて隨
 意にせしめ其れと共に四の數へかたも練唱せ
 り其後正方形長方形を五つ又は六つ與へて五
 六等の數へかたを練習せり時には正方形と長
 方形とを混じて與へしあまり用ひかた少な
 く長方形のみを與へし方よほどおもしるかり
 き今之等につき子供の工夫せし者を舉げんに



其後次第に積木の數を増し遂に八に達するに及びて第一、積木を興へたり箱を渡すやうになりてはいつもまづ其箱を人數だけ机の眞中に並べおき其後保姆の命によりてこれをつづとり定められし如くにわけあとは又もとの様に眞中に並べをくを常とせり而して積木の度毎に八の數へかか練習をなすを例とせり遊び終りし時には各箱の中に入れ保姆の許に持ち來らしむ又積木のみ興ふこともあれども多くは貝をも興ふ時としては植物の葉など興へしがよほど悦びで遊びたり

數へかたの練習は他のものによりてもなせしが主として此積木により

隨意に積ましむる時は涼車、軍艦、トンネル、オルガン、おうち、等最も多し、

小供が何か積むときは別に「何を積まん」との目的を有せずして積むこと多し、よい加減に積み重ねて「先生これなに？」と問ふもの多きはおもしろし、

八板排、環排、

九畫 方

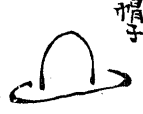
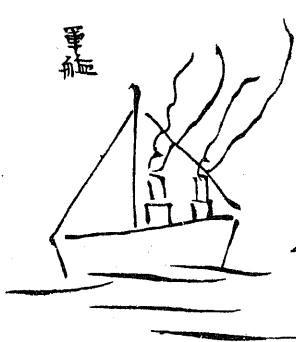
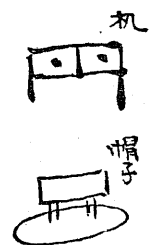
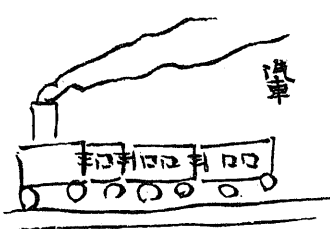
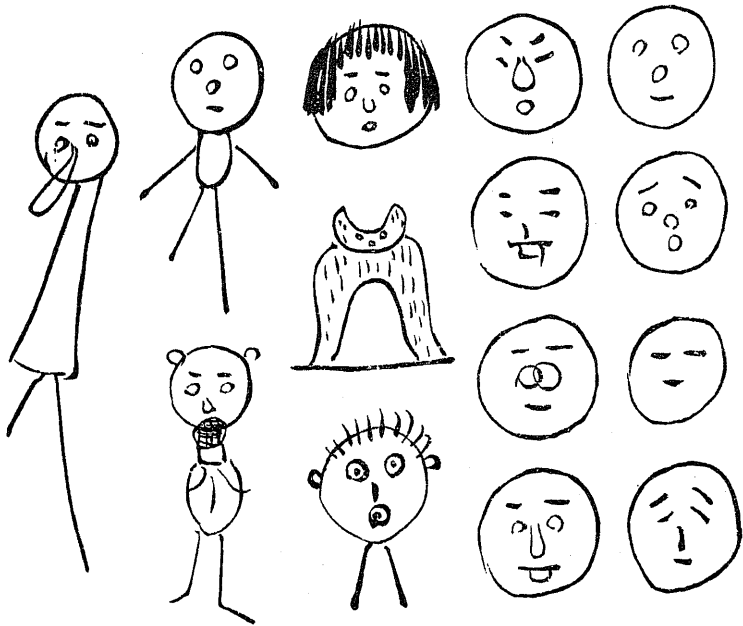
子供にあまり興味を起さしめず、これを積木の如く立体となすこと易からず又運動せしむること能はざるが爲め活動性にとむ子供には此方面につきてはあまりおもしろくなきものならんか板排にありて

雁を□□並ぶるはむづかしかりき

子供はうすき板を立てかけて立体となすこと上手にておもしろがりてなす、△□の如きは家として立体となし悦びるたり

はじめはまづ石盤もて隨意に畫かしめたりとにかくいやと云ひて石筆もたぬものはなかりき。たい何とも分らぬものをぐるぐると畫き廻しむるたり一ヶ月に一度は紙に畫かせて後日の参考とせり、

最も多く畫かれたるは電車にして團子旗など之に亞ぐ、今隨意畫中おもしろきもの少しばかり擧ぐれば



十外 遊

外にてなす遊びの種類

一、かけっこ、或場所に線を引き四五人並びて一、二、三、にてかけ出す、多くは時場所を定め置き其所よりもと來しみちを返すなり此時小山の上にてスキを肩に「僕が用意ドーンといふ人だよ」と

いふ男兒のおもしろさ、

一、鬼ごっこ、ジャンケンポンヨと幾度もくくり返して飽くを知らざるものゝ如し、

これ其勝敗を見るにあらずしてふしのジャンケンポンヨといふがおもしろきなり六七度もなせし上にて「それぢや先生が鬼になりませう」と云へば皆周章て逃げ出すあり鬼の袂に縋りておもしろさうに随ひ來るあり、喜色満面に溢るゝはよけれども先生はいつまでもくく永久に鬼なり、もし誰かに鬼を譲らんと其よし云ひわたさば今度は全

体の幼兒が鬼となりてたい一人の先生目がけ右よりも左よりも追ひ廻す實に無邪氣なる鬼ごっこなりかゝるもの最も適したりと見えていつも「先生鬼ごっこ」をせまるが常なり

一「モーイーヨ」眼をわけて見れば庭の隅に四五人集まりて自分の顔ばかりかくして居れりさがすものも其れを見ぬふりしてこゝかしことありき過るかかしさわまり早くさがし出さば「つかまへなければいけない」と山口が必死になるも愛らし、

一、砂遊び 入園當時最も盛んに行はれしものにして暖かき日小山の麓にてザルとお杓子を友に誰とかれとよく遊びたりこの組は他の組よりも早く遊園に出づるを以て砂遊びの道具を占領し氣の毒なりき、當時はお山お園子最も多かりき其後は次第に進歩して電車、トンネル庭園等を作りたり、中には電車最も

一、
かもしろし、即ち積木の上に砂を盛り
其れに小さき枯枝二本突きさして押し
進むなり他の遊びの盛となるにつれて
砂遊びは入園當時はと盛ならず氣候の
關係にもよる、

一、
砂糖や、米や遊び、庭の隅にも多く女
児に行はる煉瓦と瓦とをすり合せて粉
を作り粉屋又は砂糖屋と稱す又小石に
て米屋をなす此類には尙料理屋植木屋
等もなせり

一、
電車遊び、スキの先きにて線路を畫く
もの之が二本のスキを間に前後となり
歩むもの數人が一列となり各前の兒の
帯など持ちて連り歩むもの等あり
採集、石、木の實、藤の葉柄、藤花、
落葉、草、昆蟲等にして非常に悦ぶも
のなり濱田榮子、土井富貴子、小平い
よ子千葉たか子吉村信子、等なか
熱心なり、よき遊びなり
昆蟲を捉へしときはこれを放ちやる

一、
やうにせしめたり
園藝の手傳ひ、花壇の手入れなどする
時には必ず來りて手傳ふ積りなり、土
を掘り返し居れどもはや終りてされ
いにせし所までも、掘返し草を取り居
れば花咲く苗までも引き抜くなとなか
くに賑はし、曾て伊藤龍夫來りて軟
くなせし地の中にタデを一本植え去り
ぬ。あまり愛らしければ其まゝなし置
きしに植つて小さきあるじ待ち顔に
ささたりしもおかし

一、
人を巻くこと

一、
二人三客、第二學期あたりより盛にな
りたり

一、
場所とり、鬼も何もなくなたゞ相談して
こゝかしこと場所を移り變るものにし
て極めて幼稚なるものなり

一、
軍ごっこ、軍ごっこといふほどあ
らず、たゞスキを肩にして、
追かけられたりなすものにして男兒中

十一 食事

凡て外遊まへに行いはるはるにありてもはじめは子供のみにて遊ぶこと能はず保母ほむ先さきに立ちてこれ等を導くこと最も大切もつとたいせつなり然しからざれば子供こどもはたゞぼんやりと佇ていづむなり然しかれども第三學期だいさんがくきにありては一人にても遊ぶやうになりたり一人ひとりで遊ぶやうにならば保母ほむは用もちなきかといふに決して然らず却かへてかく遊びあそびの盛さかんとなるにつれて其中そのなかに混まじ其遊びあそびを監督かんごく指導しうどうすることに盡力じんりきすべきなり又外遊まへにありては怪我けがをなすこと比較的ひかくてき多おほきものなれば大おほにこれが監督かんごくに注意ちゆういすること大切たいせつなりこの一年間いっねんかん云ふほどの怪我けがなかりしは最も幸福しあふなり、

食事は子供こどもの最も樂たのしむところにして「先生せんせい僕ぼくけんパン」先生せんせい僕ぼくも「先生せんせい私わたしけんではん」「わたしはパン」と口々くぐぐに朝あさよりたのしめるもおもしろし入園にようえん當時たうじは隨意ずいいとなせしが四月十日しがつにじふにちにお辨當べんたうをもち來きたりしもの八名はちめいなりお辨當べんたうの時は、必ず手てを洗あらはしめ一同揃そろひし上に

十三 退園

て正しく樂器がくきにて禮れいをせしめそれよりはじむはじめの内うちはあけること、御茶碗おちawanにうつしとること、仕舞しまいふことすべてなし與あへしが次第しだいに自分じぶんにてなすやうに導みびき第三學期だいさんがくきにては大抵たいてい自分じぶんにて出來でるやうになりたり、(但し時々ときどき手傳てんづを要えす)辨當べんたう早はやきは十五分じふごふん遅おそきは四十分しじふふんもかゝる終しまらば(御馳走おちしうさま)と云いはしむ終しまりしものは遊園いうえんに出いて、遊あそぶ但ただし其時そのときの都合ごうごにより監督かんごく者しやなきときは暫しばらくく部屋へやの中なかにて遊あそばしむ、教生けうせい出いづるやうになつて後は一人は子供こどもと共に食事じきをなし外の監督かんごくに出いづるやうにせり、寒さむき時は鐵管てつくわんの上うへにお辨當べんたうのをせ置おきてわたさむ

「オハイリ、三さんの組ぐみオハイリ」先生せんせいもう御歸おかへり?」と問とふやがて遊あそび疲つかれし子供こどもは手を洗あらひて部屋へやに入るいる帽子ぼうし、外套がいのう肩かたかけ、お辨當べんたうをそれこれに配くばり與あたふ子供こどもはよく其主そのぬしを知しりて新あららしき教生けうせいなどに「それは何某なに某さんの」と

教ゆ一騒ぎして静まれば何れも手を膝にお辨
 當前に行儀を正す、やがて「今日の遊びもす
 みました……」と歌を終るや禮をなして部
 屋を出づこの唱歌を歌ふときは朝の出席調べ
 と同じく其行儀を正しくせしむる習慣とせり
 玄關に至れば何れも「先生サヨ一ナラ……」
 と口々に聲張り揚げて云ふ其顔をよく見ざる
 ときはなかく承知せず三度も四度も「先生
 サヨ一ナラ」といふ、とりまぎれて「先生オハ
 ヨー」といふもあり、半日を遊びつくして林
 檜のやうなる顔して歸る姿を見送りは怪我
 なかりし一日を悦ぶが常なりき、(をばり)
 四五人の子供を集めて何となくたい思ひつき
 のまゝをはしめしにのみしろきふしもありぬ
 子供の精神の大分及び観念聯合の様も少しは
 知らるればとて其まゝをかきつく

菊の花、椿、お肴、鯉、余太郎、緋鯉、熊、
 鼠、金魚、鹿、兎、鶴、猿、龜、熊、菊、軍
 艦、鷺、鷹、さじ、鳶、菊、猿、軍艦、鼠、
 椿、菊、腰かけ、椅子、机、茶碗、硯箱、硯、

猫、きれ、大鉄、おだんど、日本一のきび團子
 ヒヨータン、リボン、毛、かべい、お味噌、
 おもちや、櫛、かんざし、椅子、獅子、熊、
 お戸棚、木、葉、眼、鼻、頬、草、櫻、れん
 げ、兎、時計、オルガン、ピアノ、鯛、本鐵
 管、土瓶、お茶、箸、みかん、梅、筆、
 ペン、エンピツ、筆、墨、柿、種子、ザ
 ル、炭屋、水道、波、お肴、貝、窓、蛤、
 丁、西洋庖丁、皿、袖、みかん、耳、帯、前
 かけ、リボン、鶴、草、軍艦、人形、御雛様
 手、羽織、渦巻、竹、木、梅、松、龍、
 筍、きのこ、金魚、おこし、箸、茶碗、
 お辨當、口、鼻、耳、軍艦、鼠、お馬、お馬
 のせなな、えび、おなな、オルガン、お鰻鮓
 お麥醬、パン、ジャム、束髪、パン、おどん
 ぶり、お酒、水、徳利、お湯、お湯呑、お辨
 當、鶴、火鉢、帖面、鉛筆、ごひけし、箸
 箱、着物、毛糸、ごみ、蒲團、彈丸、風呂し
 粒、お菓子、紙、箱、短筆、色鉛筆、ごはん
 海苔、手、鳥、龜、猿、兎、金太郎、熊、

鹿、兎、鼠、蝙蝠、庭、葡萄、猿、壁、硝子、鼠、薑、お肴、袋、富士山、藤棚、櫻、兵隊さん、鐵砲、劍、刀、スキ、杓子、泥、三味線、琴、お醬油、お砂糖、風呂敷、前かけ、フランネル、寢臺、いかり、雀のかうち、帽子、紙、手、頭、眼、チヨンマゲ、麒麟、象、犬、牛、龍、竹馬、櫻、藤、顔、金魚、舟、牛馬、リボン、毛、おでこ、眼、鼻、鼻の頭、鼻の口、硝子、前かけ、着物、乳くび、耳、襟、蟲、とんぼ、蝶、花、梅の花、齒、旗、亞米利加、日本、聯隊旗、蒸汽船、舟、帆かけ船、お月さん、三ヶ月さん、日本の軍艦、人の鼻、犬、鹿、こんく、鈴、ポチ、手毬、着物、ズボン、襦袢、羽織の紐、羽織、あたま、チヨンマゲ、毛、靴止め、靴下、椽側、ふうち、石筆、勳章、色鉛筆、黒鉛筆、ボタン、木の花、色鉛筆、お役所、手、鼻、草、喉頭、おなか、血、虎、ライオン、鹿、馬、牛、鷲、虎、熊、お辨當、パン、バタ、風呂敷、ジヤム、水道、耳、みづく、鼻、菊、眼、蛇、蛇の

黒いの、駱駝、雀、雀の舌、舌切れ雀、軍艦、屋根、鼠、猫、木、金太郎、熊、帽子、獅子、麒麟、象、駱駝の赤ちやん、象象の赤ん坊、兎、リボン、瀛車、風、外、電車、の道、電車、電車、停電、電車が出る、さんちやく、わた、牛の肉、豚の肉、牛乳、棒の花、梅の花、櫻の花、枇杷、呼子、留外、五徳、太鼓、笛、喇叭、着物、蓄音機、ポンプ、火事、葡萄、柿、桃、菓子、林檎、密柑、梨、笛、樂隊、落第、學校、一つ橋、大隊、中學校、師範學校、門、猿、鶯、鶏、鶏の子、ヒヨツコ、虎、馬、羊、羊の子、猿、兎、ケツト、蒲團、籠、絹、洋燈、草、泥、野原、お山、小田原、國府津、横須賀、神戸、帽子、紙、塵紙、鉄、外套、肩かけ、洋服のズボン、ボケツト、前かけ洋服のからだ、洋服の手、お人形さん、お猿、木杓子、スキ、桃、色、リボン、色鉛筆、雀、風船玉、アブラムシ、油、麥羹、

以上を通觀するに意味の上より連絡せるもの

あり、

(但し此時部屋内に軍艦の繪ありたり) 男兒の云ふところ軍艦、電車、漁車、猿、鷲、スキ等多く女兒はリボン着物前かけ、菊、櫻、其他名所に關係あるものを云ひ出せり 以上の中にて

動物は 九八、

植物は 四六、

人工物は 一一七、

一、家庭との關係
父兄母姉戀話會等には其家族より何れも出席し種々懇談し子供の家庭に於ける有様等よく分りて益する所多かりき、平常と云へども其母など時々來りて參觀す、松平、佐々木、濱野、等の父又は母、等よく參觀す松平の如きは最も熱心にして其注意力等につきて質問するなどあり、



主人と僕婢

樂 天 子

中等以上の家庭にあつては、概して父子夫婦兄弟などの關係ばかりで、其の間に他人の混在なきため、比較的家政整理にも宜しく、家族團樂の趣味も自ら得らるゝものであるが、中等以上の家庭にあつては、是等天然の血族者の外、家令家従又は番頭手代の類、下女下男に至るまで一家内に雑居し、ために何れの方面にも一段の復雜を來すは勿論、延いて家政の糜亂を招き、従つて家庭の趣味を殺ぐ様になる、吾人は家政整理のため、且つは家庭の圓滿を期するがため、之が豫防策を講じねばならぬ、而して其雇人にも通勤者あり、宿泊者あり、其の種類に至つても千差萬別と言はぬはならぬが、今茲には最も範圍を狭めて、世の主人てふ者と終日同居して、最も密接の關係を有する、雇人中の雇人ともいふべき僕婢に就て陳べん。主人と僕婢の關係たる、僕婢の欠點を吹聴せざる